
呪神

マボヤン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪神

【Nコード】

N2989R

【作者名】

マボヤン

【あらすじ】

高校の入学式の次の日の朝…不幸が続き時間は遅刻寸前に。全速力で走る主人公の前に現れたのは自らを死神と名乗る少女だった。その少女の出現により主人公の生活は大きく変わっていく…
神の存在・呪いなど、信じられない日常が始まってしまう。

00 死神

「最悪だあ！！」

というのもこの少年神浜浩示^{かみはまじうじ}は高校の入学式を終えた次の日の朝：新しく買った目覚まし時計は電池を入れるのを忘れ、トースターはパンを焼いてる途中に故障、星座占いは最下位、やっと家を出た頃には走ってホームルームに間に合うかどうか：神浜は全速力で学校へと走った。

家を出て5分ほどにある曲がり角を曲がったとき、そこには1人の女子が立っていた。全身真っ黒の服を着ていて、青紫の髪には髑髏のヘアピンがついている。その瞳は綺麗な紫の光を放ちまっすぐ神浜を見つめている。身長は同級生女子の平均ぐらい、約150cm後半というところだろう：すると彼女が突然話しかけてきた。

「お前の寿命はあと5分だ。」

しかし、そう言われたところで神浜には立ち止まって文句を言う時間などなかった。刻一刻とホームルームの時間は迫ってきているのだから。神浜はとりあえず彼女をスルーして先を急ごうとしたとき、「止まれ、少しだけ話をしよう。」

彼女の後ろからなにやら物騒なものが出てきて神浜の行く手をさえぎった。一体どこにしまっていたのかそれはどでかい鎌だった。刃の部分を神浜の腹部あたりに待機させる…

「っ…！！」

流石に神浜も鎌を進行方向に出されたら止まるしかなかった。

「誰だよお前！！俺に何しようって言うんだ！？」

「私は死神だ。お前の寿命を伸ばしてやるのだありがたく思え。」

「はあ？」

神浜は彼女が一体何を言っているのか分からなかった

「死神って…証拠はあるのかよ！？」

「証拠？」

「そつだよ！死神みたいな非現実的なもの俺は信じないからな。」

「なるほど。では急ぎのようだ走りながら話そう。」

「というと彼女は走り始めた。」

「なんなんだよ止まれって行っただと思えば走り出す…」

神浜はぶつぶつ言いながら走り出す。

「証拠ならもう少しで分かると思う。証拠が分かるまで神について説明してやろう」

「いや…いいです。」

「日本には無限に神がいると伝えられているだろう？」

（無視かよ！！）

「ああ八百万の神やおよろずのかみって奴だろ？天照大神とかお稲荷様あまてらすおおみかみみたいな」

「うむ、皆難しい読みをするあれだ。しかし実際の神はそんなものではない。」

「どういうことだ？」

「つまり、現代でも知られている神とは神の一部に過ぎないってことだ。」

「まあ無限にいるんだから50とか100とかは確かに一部だな。」

「そういうこと…」

そして自称死神の彼女が続きを話そうとしたとき大きな音がした。

それは目の前の交差点で車が衝突したときの音だった。

「時間か…どうだ私と話していなければお前はこの事故に巻き込まれていたのだ。」

確かにあそこで立ち止まっていなければちょうど神浜は交差点にいただろう。神浜は呆然と立ち尽くした。

「じゃあこの続きはまた話そう。」

そついったと思えばもうそこには彼女の姿はなかった。神浜はそこからしばらく動けずにいた。そしてヨロヨロと動き出し学校へと歩を進めた。

01 呪学

学校につく頃にはホームルームは終わり、みんな最初の授業の用意をしていた。

「はあ、朝から災難だぜ……」

神浜は自分の席に行くとかバンを机の横に置いた。そこに1人の男子生徒がやってきた。

「おいおい朝からどうしたんだよ？」

さおとめともかず

同じクラスの早乙女智一だ。早乙女と神浜は小学校からの仲だ。この高校にあがってから同じクラスとは、2人の縁はきれないものだ。

「ちよつといろいろあつてな……」

神浜は登校中にあつたことはとりあえず黙っていることにした。

「そうか、おつと1時間目始まるぞ。」

「ああ、また後で。」

それだけ会話すると早乙女は自分の席に戻っていった。神浜もカバンから教材を出して準備をする。そしてしばらく経ってチャイムが鳴り先生が入ってきた。身長は高めの細身の男性で性格が明るそうな人だ

「よおーしじゃあ最初の授業を開始するぞ。…君号令かけて。」

先生は神浜を指差す。神浜はめんどくさそうに号令をかける。

「きりーっ……れーい。」

生徒はおのおのに礼をして座った。

「よしみんなまずは僕の話聞きなさい。」

生徒達は先生の顔を見て話を聞く体勢になった。

「まず改めて入学おめでとう。僕は理科総合改め呪学^{じゅがく}の担当の谷川^{たにかわ}だ。」

神浜は頭にハテナが浮かんだ。他の生徒達もざわざわしている。思い切って神浜は谷川に聞いてみた。

「あの、呪学とはなんですか？」

「ああ、知らないで入学した人も多いみたいだし説明させてもらうよ。ここ霧雨丘高校は授業に呪学を取り入れているただひとつの学校だ。呪学とは簡単に言えば呪いについての基本的な学習をする。」

「呪いなんて存在するんですか？」

生徒がさらにざわざわする。

「呪いは存在する。現に呪いについて学習したいからこの高校に入ったという奴もいると思うが…」

神浜が辺りを見回すとごく一部だけ呪学がまるで当たり前かのように受け入れている奴らもいる。

「まあ詳しいことはこれから知ればいい。とりあえず理科総合という名の呪学の教科書の2ページを見てくれ。」

生徒は言われたとおり教科書を開く。神浜も教科書を開く

「では呪いとは何か分かるか？」

分かるわけもない…誰も手を上げない。

「誰も分からんか…では説明する呪いとは人の恨みである。呪う人が相手を恨むことで呪いは発動する。さらにその力が強ければ強いほど長期間続く強力なものになる。では有名な呪いとは何かは分かるか？」

またも沈黙が続く…

「しょうがない君！！適当でもいいから答えて見なさい。」

先生は早乙女を指差す。早乙女はしばらく黙っていたがようやく口を開けた。

「…丑の刻参りですか？」

「そのとおり！！」

谷川は黒板に呪いと書いて、その下に丑の刻参りと書いた。

「丑の刻参りは藁人形を相手に似せて五寸釘を藁人形にさすものだ。そして相手はその釘で打たれたところと同じ場所を怪我したり、突然出血したりするわけだ。しかし！！」

谷川はいきなり大きな声を出した。

「呪いはそんなに怖いものではないから安心するように！！丑の刻参りは人を呪い殺すものだがそれは一部のものだ。君たちに人を殺せるほどの呪いは教えるつもりはないし、知る資格もない！！」

それだけは谷川も念を押しておきたかったのだろ。それだけ強調して言い終わるとまた落ち着いて話し始めた。

「僕が教えるのは例えば…猫野^{ねこの}。」

と言いながら1人の女子生徒を指した。

「君には猫の呪いがついてるね。」

猫野はおどおどしながら頷いた。

「猫の呪いとは何か答えてくれるか？」

猫野はしばらく黙っていた。

「話したくなければ話さなくていい。ごめんなまだ慣れてないのに…」

谷川は猫野に謝り次の生徒を探した。

「早乙女！説明するか？」

次に谷川が指したのは早乙女だった。神浜は早乙女に注目した。

（まさか…早乙女に呪い…？）

しかし早乙女は答えようとしなかった。

「呪いはその人のコンプレックスでもある。しかしこの学校には呪いを持った生徒…もちろん先生もいる。呪いを持っていない奴も持っている奴も仲良くなー！！」

その後谷川は呪いの歴史など眠くなるような話を話し始め授業は終わった。

（神の後は呪いかよ…）

神浜は今日の出来事を整理しようとしていたが、途中で存在してしまっただけというが…というとても簡単な答えを勝手に見つけ考えるのをやめた。

02 神の刻印

あつという間に全ての授業が終わった。1時間目から神浜と早乙女は会話をしなかった。しかし、神浜は早乙女の席に行き、思いきつて早乙女に話しかけた。

「なあ早乙女…」

早乙女は少しビクツとすると聞き返した

「なんだ？」

「担任ってどんなやつだ？」

神浜は入学式ウトウトしていて担任の先生を聞き逃していた。さらに今日の遅刻もあつて担任の顔を見ていなかった。

「来たら分かるよ。」

神浜は嫌な予感がした。その先生だけは担任であつてほしくない奴だ。しかし、神浜の嫌な予感は当たってしまうことになる。

「お前らー席に着けー。」

そこにいたのは谷川だった。

「帰りのホームルーム始めるぞ。」

生徒は全員席に座る。

「じゃあ挨拶は1時間目もお世話になった神浜ー!!」

「きりーっ、れーい」

「よし、じゃあ連絡するぞ…」

谷川は不審者情報や保険だよりの配布をしてホームルームを終わらせた。その中でひとつ気になることがあった。

「あと、もし部活に入りたい奴がいれば呪学部がお勧めだからな。じゃあおしまい解散!!」

（呪学部…？）

神浜は早乙女を誘って見学に行こうとした。

「早乙女ー!!呪学部行くか？」

「別に興味ねえし行かねえ。」

「そうか…」

神浜は諦めて早乙女と一緒に帰ることにした。

「そういえばさお前本当に呪いあるのか？」

神浜は聞いてはいけないと思っていたが、今後一緒に仲良くやってく者としてしっかり聞いておきたかった。早乙女も同じ気持ちだったのだろう。口を開いて言った。

「ああ、俺は呪いを持っている…詳しくは言いたくない。」

「そうか…」

神浜はそれ以上聞かなかった。すると今度は早乙女から質問が来た。

「お前は呪い持つてるのか？」

「俺は自覚はないけど…ないと思う。親いないからそんなの教えてくれないし。」

「そつか。悪いな…」

「いや、別に。」

神浜は父親は神浜が小学校2年のときに家を出て行って、母親は去年トラックに轢かれて死んだ。

「それじゃ、俺ここ曲がるから。」

曲がり角まで来ると神浜は早乙女と別れた。その後しばらく歩いて家の前まで来た。1人暮らしなのに一戸建てで造りは古いものの十分広い家だ。神浜は玄関を開けてすぐ左の居間にカバンを置いてトイレに行こうと思った、そのとき神浜はとんでもないものを見た気がした。

「遅いぞお前。」

それは見間違いではなかった。今朝あった死神が居間でくつろいでいた。

「何でお前がここにいるんだよ!!」

「言っただろ、続きはまた話すと。」

とりあえずスルーしてまずはトイレに行く…居間に戻って少し間をおいてから神浜は叫んだ。

「ふーざーけーるーなー!!!」

「ふざけてなどいないつもりなのだが。」

「誰も続きが聞きたいとは思ってねーよ!」

「朝は神はそのような存在ではない!!というようなこと言って終わったな。」

「スルーですか!初対面だから我慢してたが勝手に話を進めるなよ!」

「おや?寿命をのばしてあげたのに感謝のひとつもないのか?」

「別に感謝してねーよ!あとなんで寿命を延ばしてくれたかも謎だし。」

「それはだなあ…お前気づいてないのか?」

「どういうことだよ?」

神浜は少し戸惑った。

「お前には神の刻印が入っているのだ。」

「別に体に何も無いが…」

「体ではない、お前の脳だ。」

「脳?」

「そうだ、神の刻印というのはだなあ、簡単に言えばある特定のことでだけでは神に並べる力を発揮することができるとを示す証だ。」

「特定のことで何だよ?」

「それは私にも分からん。」

「分からんって…」

「それはさておき私たちは神の刻印を持つものを優先的に長生きさせなければいけないのだ。」

「なんで?」

「それを知る権利はお前にはない。そして神の刻印をもつ奴の本来の寿命から我々死神が側につくことになっている。」

「はあ?」

「本来の寿命が過ぎると他の人より死にやすくなるのだ。よってその死にやすさを補うのが死神の仕事だ。」

「なあ…側にいるってどのくらい?」

神浜は恐る恐る聞いた。

「私がすぐ駆けつけれる距離、そうだなあ…ここからあの建物ぐら
いまでなら大丈夫だろう。」

死神は窓を開けて遠くにある学校を指差した。

「結構離れられるんだな。」

「何を言っているあの建物が大きいからぎりぎり行けるのだ。」

「建物の大きさ関係あるのかよ…」

「あるに決まっている。建物が大きいほど神の力は強力になるのだ。」

「

「どんな原理だよ…」

「お前に言っても混乱するだけだ。」

「そりゃそうだ…」

「だからここで寝泊りとかもさせてもらうからな。」

「はああああ!？」

神浜はこの世のものとは思えない奇声を上げた。

「なんでだよあ!？」

「これだけ広いのだ使っていない部屋などあるだろう。…お前も早死

にしたくないだろう？」

そういつて死神は近くにあつた階段を上ろうとした。

「まてっ!！」

「なんだ異論は認めんぞ。」

「お前のことはなんて呼んだらいいんだ。」

「死神と呼べばいいだろ。」

「いや、なんか俺が痛い奴みたいになるから…」

「私は死神以外の何者でもない。」

「そっか…」

「参考になるかは知らんが死神にはナンバーがある。ついでに私は
137だ。」

「137? イチ…サン…ナナ…そうだ!！」

「どうした? いい名前でも浮かんだのか？」

「語呂合わせだが…イサナはどうだ。」

「…勝手にしろ。」

そういつて死神改めイサナは階段を上っていった。神浜の家に変な同居人ができてしまったが、神浜は正直迷惑なわけではなかった。家族が増えたかのように嬉しかったというものもあったし、なにより今日だけで神や呪いといった不思議なものを知ってしまったことに対する興味がわいてきたからだ。神浜は死神が2階にいったし、しばらく経ってから、2階にある自分の部屋に行つて寝た…。

03 ろづの神

「おい、起きろ」

目が覚めるとそこにはイサナがいた。

（そうか俺死神と同居することになったんだ…）

「どうしたんだよ…」

「腹が減った。朝食を作ってほしいのだが。」

神浜は眠気のせいで怒る気にもなれなかった。

「冷蔵庫にパンがあるからそれでも食ってろ。」

そして神浜はまたまた眠りにつこうとしたとき、イサナが再びしゃべりかけてきた

「そうか、わかった。あとお前、今日は走らないのだな。」

その言葉に神浜はビクツとして近くにあった目覚まし時計に手を伸ばす。

「なんだまだ6時じゃないか…」

神浜はほっとしてからイサナに言った

「6時半になったらおこしてくれないか？」

「断る。私はお前の母親か!？」

「そりゃそうだ…」

神浜は仕方なくベットから出た。居間に行き、冷蔵庫のパンを取り出してイサナに一枚わたしてイサナに聞いた。

「そういえば、神の刻印を持つてる奴って大体何人ぐらいなんだ？」

「分からん…確認されただけならお前を含め3人といったところか。」

「そんなに少ないんだな…」

「当たり前だ、神に近い奴が大勢いてたまるか。」

「そうか…」

神浜はパンを食べ終わり時計を確認する。

「こんなに早く起きたことないから暇だなあ。」

時計はまだ10分しか進んでいなかった。

「暇なら散歩にでも行けばどうだ？」

「はあ？嫌だよこんな朝早く。」

「そうか…？思わぬ出会いがあるかも知れんぞ。」

「どういうことだよ。」

「言葉のままだ。」

「っち、そこまで言うんなら散歩にでも行くか…」

「出会いがほしいのだな…」

イサナがポツリとつぶやく

「うるさいな。まあついでに自販機でジュースでも買ってくるよ。」

と言い神浜は外にでた。すると小さな少女が家の前を横切った。神浜はそれが人間ではないとすぐわかった。白い髪に白いワンピース
白い肌：全身真っ白の中で赤い瞳と頭にとる炎が目立っていた。

神浜はその少女を追いかけて声をかけようとしたが、そこにはもうその少女はいなかった。

「奴の寿命はそんなに長くないな。」

いきなり後ろから声が聞こえて神浜は叫んでしまった。

「なんだよイサナ…」

「思わぬ出会いがあっただろ？」

「…否定はしないがな。あいつは何だ？」

「あれはろつの神だな。」

「ろつ…？」

「ああ、ろつそくなどに使われるろつだ。見るからに産まれてから7年ぐらいか…」

「神様ってそんなに寿命が短いのか？」

「いや…我々は1000年までは人間と同じように老いて1000年以降には腕に寿神しうじんがみの証をつけ、自分の気に入っている姿で何千年と生き延びる。」

「それでその証がなくて見た目が人間の7歳ぐらいだから…。でも何でさっきの子だけそんなに寿命が短いんだ？」

「神の死は二つ、信仰がなくなりそのまま自然消滅か、自分で神の力を完全に消耗し消滅するかだ。そして奴は後者だな。」

「なんでそんなこと…」

「それは頭の炎だ。ろうの神は信仰はあるものの寿命は短い、なぜかというと産まれたときからあの炎のせいで自分の力を常に放出しているからだ。そんなことを何年も続けければ消滅するに決まっている。」

「どうしたらあの炎を消せるんだ？」

「何でそんなこと聞くんだ？」

「あの子を助ける。」

「別にかまわないだろう。あの子を助けたところで代わりなど他にいる。同じ神が存在しないと思っただら大間違いだ。」

「でもあの子は1人だ。」

イサナはしばらく考えてしゃべりだした

「仕方ない奴だな…ろうの神は自分で炎を制御することができる。しかしそれは個人の意思だ。炎を止めたいという強い意志に反応して炎が止まる。だから私たちがどうこうじゃないんだ。」

「それだけ教えてもらえば十分だ。」

神浜は散歩を諦めて家に入り時計を見た。

「それじゃあ俺は学校行くから。」

神浜はカバンを持って家をでた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2989r/>

呪神

2011年10月8日20時12分発行